ベトナム紀行(1)

ベトナム北部山岳地帯を目指して

南北に長細いベトナムの最北部、中国との国境に近い山岳地帯を訪れました。旅をしたのは、七月の終わりから八月の中頃にかけての雨季の真っ最中でした。

北部ベトナムは熱帯モンスーン地域です。そのため、はっきりとした雨季と乾季のサイクルがあります。雨季の中でも南西モンスーン季(五月～十月)は、大陸の低気圧の影響から雨が一番多く、年間降水量の八十パーセント以上がこの時期に集中しています。

しかも旅の多くは山の中ですので、天気は一層不安定になります。雨にはずいぶん悩まされましたが、もとより覚悟の上です。変転極まりない空模様をものともせず、驟雨にずぶぬれになり、増水した川をこわごわ渡り、泥濘に足をとられての旅を楽しみました

旅の目的は二つ。一つは田植えを終えたばかりの棚田。さぞかし緑のじゅうたんのような早苗が美しいでしょう。棚田は山地に住むことを余儀なくされた少数民族が、生きる糧を得るために何代にもわたって必死に切り開いたものです。

用水源が遠い、山腹水路の管理がむずかしい、畦が急傾斜で崩れる危険性が高いなど、とても手間がかかる田んぼです。しかしベトナム北部山岳地帯では、焼き畑のトウモロコシイモの栽培と並んで、棚田での米作りは今でも盛んに行われています。

二つ目は山間に今も伝統を守って暮らす少数民族の女性たちの美しい衣装と青空市場です。日本では明治以来、和魂洋才の掛け声とともに江戸時代の和装が急速に失われて行きましたが、ベトナムの山奥にはまだ伝統的な衣装を失わず、民族の誇りや連帯意識のよりどころとしている人たちがいるのです。

そして山間の小さな村で定期的に開かれる市場には、個性豊かな衣装に身を飾った女たちが、自分たちが作った農産物や

ラオカイはベトナム最北部、中国との国境近く

山の幸などを持って、色とりどりの蝶が群れ飛ぶように集まって来るのだとか。

旅の起点はラオカイ省の省都ラオカイ。ハノイと鉄道で結ばれており、ハノイを夜十時に出た夜行寝台列車は朝六時にラオカイに着きます。

ラオカイは紅河(ソンコイ河)を挟んで中国雲南省河口の街と境を接し、国境交易で賑わっている町です。紅河は、中国・雲南省のタリイ湖を源流に、ラオカイから首都ハノイを経て、トンキン湾に注ぎ込む全長約千二百キロの大河で、ベトナムでは母なる川と呼ばれています。

ラオカイ駅

駅には予約した車の運転手ティエンさんが迎えに来ていました。まだ三十歳半ばぐらいで、簡単な英語ができるというのでガイドも兼ねています。ラオカイから四輪駆動車で北東に約三十六キロ、中国国境にほど近いカンカウ村をまず目指します。カンカウ村では毎週土曜日に地方色豊かな青空市が開かれるのです。

途中でバックハーという町を通りました。フランス植民地時代の花モン族自治区の王族が住んでいた町で、バルコニーを持ったコロニアル様式の建物が通り沿いに見られました。この町の日曜市も有名です。しかし最近は多くの観光客が訪れるため、外国人向けのおみやげ屋が次第に増えて、生活に密着した地方色豊かな雰囲気が失われつつあるようです。

バックハーからは、道は細い曲がりくねった山道を登ってゆきます。途中で数人の女性がお田植えをしているところに出くわしました。日本では機械化が進み、菅笠をかぶった早乙女を目にすることもなくなりました。一反(十アール)の田植えをするのに五人がかりでおよそ一日かかったものが、今や機械では二時間もあれば終わってしまいます。田植えは私にとっては幼いころの郷里を思い出す懐かしい光景です。

バックハーの町並み

ベトナム北部では、あまり高地にならない限り二期作が行われていますから、雨季作のお田植は六月末から七月末にかけて行われます。アジアの旅は秋口の乾季に出かけることが多いので、稲穂が垂れる黄金色のじゅうたんは何回も見ていますが、田植えと雨に煙る早苗の風情も見なければ片手落ちというものです。

稲作には田んぼに直接、種をまいて育てる直播法と、苗代で育てた苗を移植する方法があります。現在、世界の水稲作付面積の九〇パーセント以上は田植えを行っています。これは苗をまずしっかり育て、それを移植した方が直播よりも根張りがよく、成長が速いためです。昔から日本では「苗半作」といわれ、苗づくりの成否が収穫の半分を左右すると考えられてきました。

彼女たちの足元には束になった早苗が置いてありましたから、苗代で苗を育て、牛を使って代掻きした田に移植するという栽培法がおこなわれていることが分かります。しかしかつての日本のように、田植縄や田植定規などによって整然と植え付けることまではやっていないようです。

私の敬愛する旅の先輩・松尾芭蕉は、「奥の細道」をたどる途中、早乙女たちの田植えに見とれ、一枚の田んぼを植え終えるまで柳の陰で見守っていました。その時の句が、『田一枚植ゑて立ち去る柳かな』ですが、私は芭蕉のように田一枚植え終えるまで眺めているほどのんびりとはできません。

中国との国境を流れる川を左手に見ながらしばらく遡行し、峠に登ってゆくと、道路の傍らで野菜を売っている子供たちに出会いました。赤ちゃんを背負い紐で

おんぶしている子供もいます。これも私にとっては懐かしい光景です。幼いころ神社の境内で遊ぶ時には、ハナちゃんもミヨちゃんも背中に赤ちゃんを背負っていました。少子化で兄弟が少なくなったのか、乳幼児の世話の社会化が進んだのか、田植えと並んで子守も最近の日本ではとんと見かけない光景です。

売っているのはタケノコ、まくわ瓜、かぼちゃ、それに籠に入れた鶏です。畑や山で収穫したものを背負いかごに入れて、ここまで歩いて売りに来たのでしょう。周囲の山肌は一面のトウモロコシ畑で、人家も見当たりません。相当遠くから歩いてきたのでしょうか。今日はここからしばらく行ったカンカウ村というところで恒例の土曜市が開かれます。この子たちはそこへ向かう人たちを狙って品物を並べているのでしょう。

ところで市場というのは、このように人々が何らかの品物を持ち寄って、道端などで売り始めたのが起源なのでしょう。持ってきた品物が売れたり、違うものと交換できたりすれば、売った方も買った方もまた同じ場所に行ってみる気になります。そんなことから同じ場所にだんだん人が集まり市場が形成されてゆくのではないでしょうか。

それが発展すれば、村と村の間で産物の交換が定期的に行われるようになります。ある村では椰子が豊富であればその葉を編んでむしろを造り、ある村では良い粘土から土器を造り、ある村では米や野菜を作って交換するといったことが当然行われたでしょう。

しばらく行くと恐れていたことが起こりました。崖崩れによる通行止めです。出発前にベトナム大手の旅行代理店に旅のアレンジを依頼したのですが、雨季の真っ只中で崖崩れが多く、危険で責任を持てないので、この時期の北部山岳地帯の案内はできないと断られてしまいました。

崖崩れで通れなければ迂回路をとるか引き返せばいいだけのことと、ラオカイで自ら車を手配して出かけて来たのです。

運転手のティエンさんが状況を確認しに行ったところ、一時間もすれば通行可能になるとのことです。崖崩れの現場では、すでに日本の重機メーカー・小松製作所のブルドーザーが道路をふさいだ土砂を

取り除いている最中です。

花モン族の女性たち

道路の修復を待っている間にも市場へ向かう人たちが車の脇を黙々と通り抜けてゆきます。オートバイや自転車の姿も見かけますが、サンダルや長靴で歩くのがまだまだ主流です。青空市は六時ごろから始まり、十二時ごろには閉じられてしまうということなので、少し焦り始めたころやっと通行が許可されました。

カンカウ村に着いたのは朝の九時頃。すでにたくさんの人が集まっています。この周辺はカラフルな衣装を身にまとった花モン族と呼ばれる人たちの密度が濃いところです。モン族は揚子江流域に居住していた人たちが、宋代以降の漢族の南下に伴ってインドシナ山岳内陸部に移動してきたと推定されていますが、史料上で歴史的変遷を確定するのは難しいようです。しかし中国の苗族と同類だと見なされており、ベトナムには約百万人が居住しているといわれています。

過去も現在もベトナムと中国の国境は歴史的・地理的な国境で、人種的な国境ではありません。その上、中国南部からベトナムへ通じるのは比較的容易だったため、つい最近まで絶え間なく多くの少数民族がこの地に流入したと推定されます。平地で耕作がしやすい紅河の沖積平野はベトナムの主力民族・キン族が占めていたため、遅れてやってきた少数民族は山地に住まざるを得なかったのでしょう。

その少数民族の中でもモン族は、一番条件が悪い標高八百メートル以上の高地に多く住んでいるといわれます。モン族はいくつかの分派に分かれており、女性の衣装によって白モン族、黒モン族、赤モン族、花モン族などと呼ばれていますが、言葉や文化はそれほどの違いはないようです。

モン族の特徴は何といっても女性の色鮮やかな服装です。なかでも花モン族の女

性は色とりどりの花が咲き乱れたようにカラフルな原色の糸を使った華やかな刺繍を身にまとっています。

裾にアサガオの花びらのような自然なウェーブがかかっているギャザースカートをはいていますが、オレンジや赤といった暖色系の横縞模様が段々重ねになっていて、かわいらしさを演出しています。

スカートの上には刺繍を全面に施した前掛けのようなものを付けています。上半身は長そでのシャツの上に肩あてベストのようなものをまといますが、スカートと同じ暖色系の横縞模様の刺繍やアップリケが施されています。さらに両腕には、事務員が服の袖口の汚れを防止するためにする袖カバー(腕抜き)のようなものを付けていますが、これも肩あてベストと同じような絢爛たる模様です。頭に被る頭巾も赤、青、緑などの鮮やかな色の布が多いようです。

かつてはほとんどの女性が自分の着る服は自分自身で手作りしたそうですが、いまでは市場で買い求めることもできます。週に一度の市場だから、これはよそ行きの服で、普段はもっと粗末な服を着ているのかと聞いたら、農作業もこの服だと言います。昔はこの恰好で一年中通し、着替えることもなかったそうです。

何を話し合っているのか

このようなファッションがいつ頃から流行しているのか、スカートを売っていた女性に尋ねてみましたが、「昔から」というだけではっきりしません。服飾史については全くの素人ですが、現在の中国貴州省などに住んでいる苗(ミャオ)族も、刺繍、ろうけつ染め、クロスステッチ、錦織などの手

工芸技術がふんだんに使われた服装を身につけていることが知られています。

また襟と袖口、スカートのすそなどには通常、各種の刺繍による装飾が加えられることから、花モン族の女性たちの服装はかつて居住していた揚子江周辺の伝統を、長い移住の旅の中でも失わず保持し続けていると考えられます。美しい幾何学文様も最近まで文字を持たなかった民族の歴史や物語を象徴しているのかもしれません。

カンカウ村の青空市場

さて市場でどんな品物が売り買いされているのか覗いてみましょう。まず道路沿いの一等地を占めていたのが野菜や果物などの売り場です。雨でぬれた地面にビニールシートを敷き、空芯菜やセリ、香菜などの葉物野菜、キャベツ、まくわ瓜、たけのこ、トマト、生姜、こんにゃく、バナナなどが売られています。近隣在郷の人々が自分の畑で作った野菜や果物を持ち寄って販売するのです。

販売を担うのは主に女性たち。竹で編んだ籠に商品を詰め、時には何キロも歩いて市にやってきます。栽培植物の他には、山で採れたキノコ類や薬草なども売られています。モン族の人たちは山を第二の畑と呼ぶそうですが、自然の恵みを余すところなく享受しているように見受けられます。

野菜の中でひときわ目に着くのが真っ赤な唐辛子です。世界には品種改良を重ねられたいろいろな唐辛子があるようですが、ここで売られているものは生のままで、かなり肉厚のトウガラシです。赤いものが多いようですが青いものもありますし、乾燥したものももちろん売っています。

私が手にしている紐で括った一把は五十円ほど。乾燥に弱いトウガラシの栽培は雨季の今が一番良く、たくさんの収穫ができるそうです。トウガラシはベトナム

唐辛子を買う

料理の代表であるフォーやお粥のトッピングとして欠かせません。

中南米原産のトウガラシは、大航海時代にヨーロッパにもたらされ、さらには世界中に広まりました。ベトナムの山奥にトウガラシがもたらされたのはいつ頃のことでしょうか。はるかな旅の果てに、この地にたどりついたトウガラシの歴史に思いをはせてみたくなります。

青物市場の脇の坂を下ってゆくと屋台の食堂がいくつか出ていました。定番はもちろんベトナム料理の代表フォーです。日本のきしめんに似ていますが、麺の材料は米の粉です。水に漬けておいた米を挽いて水を加え、ペースト状にし、熱した鉄板の上に薄く流します。適度の柔らかさに固まったら、取り出して細長く裁断して麺の形状にします。

すでに屋台では女性たちが、籠をおろして腹ごしらえです。私も麺類には目がない方ですから早速、長椅子の脇に座らせてもらい、一杯三十円ほどのフォーを注文しました。

スープは鶏や牛から出汁を取った透明なあっさりしたものです。これに米の麺を入れ、鶏肉や牛の薄切り肉をトッピングします。最後にライムの絞り汁をたっぷりかけ、チリソース、ニョクマム、トウガラシやスライスしたニンニクをつけ込んだ酢などを加えて各人が好みの味に仕上げま

す。

フォーは早い、安い、うまいの三拍子そろったベトナムの国民食ですが、米の粉でつくった麺は中国南部から東南アジアにかけて広く分布しています。麺類の発生と伝播に関する総合的研究を行った民族学者の石毛直道は「文化麺類学」なる著書の中で、ベトナムのフォーは、中国広州の沙河に源を発したものだと指摘しています。もともとは広東省潮州出身の華僑がもたらした潮州料理で、マレーシア、シンガポールでは條(クイティオ)または河粉(ホーフン)、タイではクイティアオと呼ばれています。

フォーのどんぶりの汁を最後の一滴まできれいに呑み干し、さてこれで腹もくちくなったと腰を上げると、むさくるしい男ばかりが座っている屋台から声がかかり、手招きをうけました。

「旅のお兄いさん、一杯やらんかね。ワシがおごるよ」

言葉は分かりませんが、すでに酔いの回った様子の男たちは、こう言っているに違いありません。酒をすすめられたら、いかなることがあっても断らないというのが私の信条です。

「朝から良い機嫌じゃのう。しからば、わしもご相伴にあずかるといたそう」

こんな調子ですぐさま酔っ払いたちの仲間入りです。小さなグラスに注いでもらった酒は無色透明。鼻に近づけると、かなり強そうです。アルコール度数は四十から五十度位はあるでしょう。

酒をおごってもらう

まずは少し口に含み、舌の上で転がしてみるとほのかに柔らかい甘さが感じられます。日本の米焼酎といっても通用するでしょう。ティエンさんの話では、「ルアモイ」という、ウルチ米からつくられる酒で、ベトナムでは庶民のお酒としてポピュラーなもののようです。

「今年の稲の出来はどうだね」

「雨が良く降るから育ちが良いよ。だから神様にこうやって感謝をしているのさ」

「ほぉ〜。それじゃぁ日照りの時は呑めないね」

「日照りで稲の育ちが悪い時は神様に雨乞いをするために呑むんだよ」

私の隣に座っている男は、お猪口の酒を親指と人差し指で掬いあげると、そのしずくを空と地に向かって弾き飛ばしま

す。

「ほら、こうやって神様にも呑んでもらうのさ。天の神様、地の神様、今年もいい米が採れますようにってね」

北部ベトナムの稲作は、七月移植、十一月収穫の雨季作(冬作)と十二～一月移植↓四～六月収穫の乾期作(春作)の二期作であることは前にもふれました。雨季作の場合は夏の南西モンスーンのもたらす降雨が十分な水を田んぼにもたらしてくれる半面、急激で大量の雨による洪水の心配が常に付きまといます。

乾期作の場合は低温と干ばつの怖れが付きまといます。東北モンスーンの強い年には一月から二月の気温がしばしば十度を割ることもありますし、絶対的な降水量の少なさに加えて中国から乾いた風がおしよせるという問題があるといいます。

いずれにしても農民たちは天の神様、田の神様に大切な稲のすこやかな成長を祈らずにいられないのは日本もベトナムも同じです。

さていつまでも酔っ払いたちと呑んでいる訳にも行きません。酒をおごってくれた男が、朝一番で「豚がいい値で売れた」という話を聞いて重い腰を上げ、家畜売り場へ行ってみる気になりました。

家畜売り場は青空市場の一番奥にありました。最初に目についたのが五十頭ほどの牛と水牛です。写真左手の黄褐色の毛なみの一群が牛ですが、これは中国から東南アジアにかけて広く飼育されている黄牛かあるいは黄牛の交雑種です。肩のあたりが盛り上がっているのが特徴でコブ牛の一種ですが、体質が強健で暑さにも強く、農耕用に用いられています。

家畜の売買

黄牛も水牛も農作業には欠かせません。まず一番大きな役割は田んぼの耕起でしょう。早苗を移植する前に生長しやすいように土壌を整えたり、雑草を防除したりするために土壌を鋤起こします。現代の日本では耕起には耕運機やトラックターが用いられ、牛の登場する余地はもはやありませんが、ベトナム山間部ではまだまだ牛は主役です。

牛や水牛は田や畑の耕起のほかにも、苗や収穫物などの運搬に、さらに牛小屋の敷きわらから作られる堆肥の供給源として大活躍しています。このようにベトナムにおいて牛や水牛は長い間、労働力と肥料生産を目的として飼養されてきました。

水牛の手綱をとっている男に話を聞いてみました。

「この水牛を売りに来たのかね」

「そうだよ。あんた買いたいのかい」

「いやいや、私は旅のものだから買えないよ。ところであんたは何頭の水牛を持っているのかね」

「五頭持っていて、去年三頭の子供が生まれたんだ。これはそのうちの一頭だ」

「いくらぐらいで売れそうかね」

「こいつは大きい方で、五百キロぐらいあるから、二億ドンくらいかな」

二億という数字にびっくりしてはいけない。ベトナムの物価はインフレ続きで、二〇一二年秋現在で百万ドンは日本円で三千七百五十円ほど。つまり二億ドンは日本円で七万五千円ほどである。

「大きい方が高く売れるのは、力が強いからかね」

男は私の言った意味が解しかねるというように首をかしげます。運転手のティエンさんが私の言葉をうまく伝えていないのかと最初はいぶかりました。しかし男の話を聞いているうちに、そうではないことにすぐ気付きました。水牛は当然、農耕用として売られているのだと思い込んでいまし

たが、私の勘違いだったのです。

ここで売られている牛や水牛は農耕用としてではなく、食肉用として売られているのです。以前は農民が水牛をと畜し、食用に供するのは、老齢で役用に適さなくなった時か、冠婚葬祭などの特別の機会に限られていたそうです。しかし現在は家畜の売買は農民にとって貴重な現金収入の機会になっているといいます。本格的な酪農というよりは、水牛は粗食に耐え、稲ワラなどの農業副産物や遊休地での放牧で飼うことができるため、山間地農業の副産物として重要なのです。

従ってこれらの牛や水牛は、町の食肉業者が買いに来ることが判明しました。確かにしばらくすると荷台を高い板塀で囲った家畜搬送用のトラックがやってきました。さてこれから購買業者と農民との間で丁々発止の値段交渉が繰り広げられると思いきや、牛たちは目方を計られるでもなく、次々と車に乗せられてゆきます。運転手のティエンさんによれば、町に運ばれてからセリにかけられるのではないかという話です。

大きな牛たちがたむろしている脇には、小さな子豚が二匹いましたが、これは日本円で三千円ほど。ティエンさんは冗談とも本気ともつかず一匹買ってくれと盛んにけしかけます。「今夜泊まる山中の村人たちに丸焼きにして振舞ったら大いに歓迎されますよ」とティエンさんは言いますが、村に着くまでは狭い車内で数時間も一緒に過ごさなければなりません。事情が分からず悲鳴を上げ続ける子豚ちゃんに別れを告げ、青空市場を後にすることにしました。

ムオンハム村に向かう。ガードレールはない

耕して天に到る

次に目指すのはラオカイ省バサット郡のムオンハム村です。この村は列車の終着駅ラオカイから北西に四十五キロほどの山奥にあります。車はいったんラオカイ近くまで戻り、紅河を経由して再び細く険しい山道を中国国境の方へ登ってゆきます。

ベトナム北部は緯度からいえば熱帯から亜熱帯に当たりますが、山岳地帯は高い標高と多雨のために温帯性の落葉樹の多い雨緑林地帯となっていて、日本の風土に似た植生を示しています。

カンカウ村の青空市場では小康状態だった雨が、再び激しくなってきました。道の左方は切り立った崖で、右方は深い谷です。右の崖から流れ出る滝のようなしぶきが車体に当たり、その水圧で車が揺れます。石ころだらけ、穴ぼこだらけの山道はガードレールもなく、路肩は雨で緩んでいます。運転を少しでも誤れば、数百メートルはありそうな深い谷に転がり落ちることは確実です。

車のつり革をつかんで体が左右に揺さぶられるのを防ぎながら、身を強張らせて乗っているしかありません。緊張で車窓の風景を楽しむ余裕もなく、ひたすらフロントガラスをにらんでいると、数人の村人たちが前方で、崖の下を覗きこんでいます。

赤十字のマークを付けた救急車も停まっていて、事故が起きたばかりのようです。車の外に出て、おそるおそる崖の下を覗きこんでみると、大きな車体が二十メートルほど下の崖の途中に横転しています。車の周囲には運転手や乗客らしい人影は見えませんし、物音や声も聞こえません。自力では車の外に出られないほど重傷を負っているのでしょうか。

集まっている村人の話によると、村を往復する公共バスが三時間ほど前に転落したということです。運転手のティエンさんによれば、公共バスは日本や韓国でさん

崖下に転落したバス

ざん使い古された中古車で、整備も不十分なため頻繁に事故を起こすのだそうです。おそらくブレーキが故障してコントロールが効かず、転落したのではないかと村人たちはささやき合っています。

赤十字マークの車を覗いてみましたが、乗っているのは医療スタッフだけで、けが人は乗っていません。医療スタッフの話で、幸いにも死者は一人も出ず、数人の怪我人が出ただけと分かりました。町からやって来たレスキュー隊がすでに怪我人を救出し、応急手当のうえ、町に搬送した直後のようです。

私の乗っている車は悪路に強い四輪駆動車のフォード・エクスプローラの新車で、ティエンさんの運転も慎重なのでそんなに心配することはないとは思うのですが、道幅の狭い所や濁流が道を横切っているところなどを通過するときは思わず目をつぶりたくなります。運が悪く大きな落石が車体に当たったり、土砂崩れに遭ったりすれば一巻の終わりです。

目的地まで早く着かないかとひたすら念じるばかりで、周囲の景観を楽しむ余裕もなかったのですが、雨が小ぶりになったり霧が流されたりした時には木々の間から対岸の棚田が時々姿を表します。

棚田は一番下の谷底から山頂まで五百メートルほどもあるでしょうか。等高線にそって緩やかに弧を描きながら、数百段の棚が整然と積みあがっています。「耕して天に至る。以って貧なるを知るべし」とは清末の政治家・李鴻章の言葉とも孫文の言葉だともいわれますが、まさしく言いえて妙です。

稲作のためには、耕作地を水平に保った上で、水や土の流失を防がなければなりません。山中の貧しい農民たちには重機など使える訳はありません。ひたすら土

を削り、積み上げ、均し、畦畔を築き上げていったのでしょう。斜面すべてを美しい棚田に整備するためには、気の遠くなるほどの時間がかかったに違いありません。おそらく何代にわたる厳しい労働の軌跡がこの土地には刻みつけられているのでしょう。

一度造り上げたからといって手を抜くと棚田は必ず崩れます。遠くからでは、はっきりと分かりませんが、棚田の法面は土で固めただけで、石積みの法面ではありません。雨水による浸食は避けられないでしょう。常に補修作業が必要になってきます。

さらに棚田での耕作は困難を極めます。急傾斜である上に、一段の耕作幅は狭いところでは一メートルほどしかありません。農作業をしている間に畑から転落する危険も常にあります。収穫物などの運搬は竹かごで背に背負うか、天秤棒で担ぐかしかありません。村の農民に聞いた話では、男たちの肩にはすべて荷を運ぶ時の瘤があるそうです。その荷瘤の大きさが農民の勤勉さの指標なのです。

棚田をみていると私は人間の生きるということへの執念のようなものを感じざるを得ません。自然の恵みに依存し、自然の厳しさにひたすら耐えて生きてゆく他の生物と違って、人間は自然を自らの都合のよいように加工し、自然界には存在しなかった栽培植物を育て、収穫物を保存する知恵を身につけました。

私たちが棚田を美しいと感じるのは、山や川といった自然景観を美しいと感じるのとは違った感覚なのではな

いでしょうか。むしろ万里の長城やピラミッドを美しいと感じるのに近いかもしれません。

その美しさの裏には、気の遠くなるような営々たる人間の営み、血と汗と涙が隠されているからこそ美しいと感じるのではないでしょうか。棚田は「大地の彫刻」ともいえるでしょう。

フィリピンのコルディレラの棚田が世界遺産に登録(一九九五年)されたことを契機として、稲作などの農業に関連する「文化的景観」に注目が集まるようになりました。日本でも長野県千曲市の千枚田が「姨捨棚田」として国指定の名勝に指定され、続いて平成十三年には石川県輪島市の千枚田が「白米の千枚田」として指定されました。過疎化や高齢化が進み、担い手が減少している日本の農山村では、道が細く農作業のための機械が入らない効率の悪い棚田は真っ先に耕作を放棄されてしまいます。

ベトナムでもいま急速に「近代化」が進んでいます。一九八六年のドイモイ(刷新)政策導入後、急激な経済成長を遂げつつあることは周知の事実です。都市部と山村地方との貧富の差はまだまだ大きいようですが、成長から取り残されている山村地域にもこれから徐々に変化の波が押し寄せてくるでしょう。このような厳しい耕作条件の棚田がいつまで残るか予断を許しません。

断続的に降る雨の中を、急峻な山腹に一筋の傷を付けたような頼りない山道を約五時間、周囲を山に囲まれた谷筋のムオンハム村に着いた時にはすでに夕暮れが迫っていました。ムオンハム村はここに着くまで左手に見えていた深い渓谷に注ぎ込む小さな一支流のほとりの村です。川の流れが作り出した段丘沿いに数十軒の家が寄りかたまっています。

この村では旅館などありませんから、今夜の宿は村人の家に泊めてもらうしかありません。電話などありませんから事前の予約もなかったのですが、ティエンさんは以前にもこの村に観光客を案内したことがあり馴染みの村人もいて、今夜の宿は思ったよりすんなりと決まりました。ホアンさんという七十歳ぐらいのお年寄り

の、隠居所のようなところにお世話になることになったのです。

家は勾配が緩く軒の深い切妻屋根で、床はコンクリート、柱や梁で建物を支える構造です。広さは間口五間、奥行四間ほどで、家の中央部には二間分ぐらいの吹き抜けがある半二階建てのような建物です。吹き抜けの空間は居間のような役割を果たしていて、大きなテーブルが置かれており、テレビがその上に鎮座していて、ホアンさんのお孫さん二人が韓国製のドラマを真剣に見ていました。

ムオンハム村

恐らくこの吹き抜け部分は農作業のための空間だったのでしょう。日本の農家でもかつては家の内部に広い土間を持っていて、いろいろな作業に使われたり、倉庫として使われたりしていました。農家というのは住まいでもあるし、仕事場でもあるのです。

正面右側には一間ほどのビニールシートを敷いた板の間があり、ここが私の今夜の寝室です。カーテンも蚊帳も付いている立派な寝室で、いつもはホアンさんが寝ているのでしょう。寝袋は持参していますし、暑い時期ですからこれで十分です。この寝室として使う部分は二階建てになっていて、天井裏部屋のようなものがあります。かつては収穫物を収納する場所だったのかもしれません。

ホアンさんの家

気に入ったのは道路に面した家の前に深い庇があることです。畳二畳ほどの寝台やベンチが置いてあり、通りを眺めながら寛ぐことができます。家の中は電球一つで薄暗くちょっと蒸し暑いのですが、外は明るく風通しも良いので快適です。天気の良い

日ならこの寝台で寝ることもできます。

軒下の寝台で雨に濡れる通りを眺めていると、ホアンさんの孫娘のランさんがお茶を持ってきてくれました。夕食は彼女が作ってくれるようです。雨のせいもあるかもしれませんが、通りは人通りも少なく静かです。明日はこの村で日曜市が開かれ、近隣在郷からやって来る多くの人で賑わうというのですが、あまりに静かすぎて信じられないような気がします。

ホアン家の自家製というお茶をすすっていると、ホアンさんが「呑むかい」といった調子で、ベトナム焼酎「ルアモイ」の壜を目の前に差し出します。夕食前に一杯飲みたいと思っていたので笑顔でうなずき、ホアンさんにも隣に座るように促します。

ホアンさん

「ホアンさんはこの村の生まれですか」

「親の代からこの村に住んでいるよ。前は山の上に住んでいたが、二十年ほど前に息子がこの市場の近くに家を建ててくれた」

「この村は何族の村なんですか」

「わしらはハニ族だよ。この辺は一番多い」

「なんでこんな山奥に住みついたんでしょうかね」

「魚は水の中に住む。鳥は空に住む。ハニ族は山の中に住むんだよ。昔からそう言われている」

ホアンさんは皺だらけの顔に笑みを浮かべながら、遠い昔をしのぶように霧にかすむ山の端に目をやりました。通訳を通しての話なので少しは違っているところがあるかも分かりませんが、ホアンさんから聞いた棚田の歴史を書いておきます。

この地に住み着いたハニ族が最初に始めたのは焼き畑です。日当たりの良い、できるだけ傾斜のゆるやかな斜面の木を切り倒して乾燥させ、火を入れます。焼き畑ではタロイモやキャッサバ、トウモロコシなどを栽培します。一定期間耕作した後、斜面を開墾し、等高線にそって平坦な畑地に改良します。その後、灌漑条件などを整え、何年もかけて徐々に水田化していったと伝えられているそうです。

彼らの先祖が長年かけて開墾した棚田ですが、ベトナムは社会主義国で土地は原則としてすべて国家が所有しています。ホアンさんたちに認められているのは土地の利用権だけなのだといいます。

ハニ族は中国元陽県などにもたくさん居住しており、「ハニ棚田」と呼ばれるほど棚田作りに長けていると見なされています。棚田はそこに生きる人々が生存環境へ適応するという物質的な適応であるだけでなく、それとともに個性と文化的な特色を醸成していく適応でもあると思われます。棚田はハニ族の人々にとって「知

恵」と「勇気」のシンボルなのだというホアンさんの言葉は印象的でした。

しかしこの村も徐々に変わりつつあるようです。この村にオートバイが通れる道が開かれたのは約二十年前、十年前には車も通れるようになったそうです。近くの川に小規模だが水力発電所が建設され、電気もやって来ました。村を出てゆく若者も多くなったといいます。

私が泊まったホアンさんの家

まだまだ豊かとはいえないけれど、この村での暮らしは都市部のスラムで感じるような悲惨な貧しさとは縁がないように感じられました。孫娘が食事の用意ができたと知らせに来たのを潮にホアンさんは腰を上げました。

今夜は谷を渡る風の声を聞き、屋根を打つ雨の音を聞き、持参したウィスキーを舐めながら眠ることにしました。ホアンさんは屋根裏部屋で寝るようです。

ムオンハム村の日曜市

湿っぽい鶏の鳴き声で目を覚ましました。板戸の隙間から外が明るくなりかけていることが分かります。夜来の雨は小降りですが、まだ続いているようです。六時を少し回った時刻ですが、外ではオートバイの走る音や人の話し声もします。

蚊帳を潜り抜け、引き戸の心張棒を外して外に出て見ると、まだうす暗いのですが、市場に人が集まり始めているようです。泊まっている宿は市場のすぐ近くなので、慌てる必要はありません。まず何を置いても腹ごしらえと、身支度を整えて市場に向かったのは七時を少し回った頃でした。雲が低く垂れこめ、山の端は見えませんが、雨は小康状態です。

この村の市場はカンカウ村のような青空市場と違って、一部屋根つきの市場です。壁はなく東屋風の吹きさらしの建物ですが、雨の日には大いに助かるでしょう。コンクリートの床の上に木製の陳列台を置き、商品を並べています。

市場の周囲には、間口一間ほどの恒久的な店舗も開いています。日用雑貨、建築材料、農機具などの店がありましたが、プラスチックや金属製品で長期の在庫が可能な製品が多いようです。昨日の夕方、村を散歩した時には、これらの商店は店を閉じていましたので、毎週開かれる日曜市に合わせて店を開けるのでしょう。

ベトナムで朝食といえば定番はフォーです。あっさりしていてしかもダシが良く効いたスープは、寝覚めの悪い私の胃袋をゆっくりと目覚めさせてくれますし、麺は柔らかく消化もよいので胃にやさしいこと請け合いです。フォーの店は市場の裏手に何軒かありましたが、一番若くて愛想のよさそうな娘がいる店に腰を落ち着けました。

床の上に建築用のコンクリートブロックを二個並べただけの即席のかまどですが、すでに薪が赤々と燃え、鍋の湯は沸き立っているようです。左手にどんぶりを持ち右手で麺を掬って口に運ぶジェスチャーをすると、娘は「フォーだね。分かったよ」とでも言いながら、テボ(茹で上がった麺を湯から揚げ、水切りする際に使うアミ)に一食分の麺をとり、手早く沸き立った湯にくぐらせます。

ここのフォーは鶏がらだしで鶏肉をトッピングするフォー・ガーです。あっさりしているのにコクあり、なかなかいい味を出しています。ゆで卵がうずたかく積んでありましたので、これもいただき朝食は鶏尽くしといったところです。

フォーを食べている間にも続々と人が集まってきます。カンカウ村では赤やピンクを主体としたカラフルな服装の花モン族の女性が大多数を占めていたのですが、この市場ではいろいろな色の服装が見られます。まず目を引いたのが青を基調とした服装の女性たち。カンカウ村の花モン族は赤を主体とした艶やかな服装でしたが、ここでは青や水色が主体です。しかし襟元から右脇へと流れる刺繍やウエストの

前と後ろに掛けられたエプロンの緻密な刺繍は花モン族と共通しています。

モン族は、花モン、黒モン、赤モン、白モン、青モンと大きく分けて五つのグループからなるといわれています。この青を基調とした色遣いの女性たちが花モン族の一部なのか、青モン族なのかは分かりませんでした。何族かと聞いても彼らはモン族だとしか答えません。どうやら花、黒、赤、白、青などの名前は外部の人間が勝手に付けた名前ではないでしょうか。

モン族の女性は働き者だといわれていますが、畑で作ったいろんな野菜を竹籠に入れて売る人やニワトリを一羽抱えて売り歩いている人に出会いました。面白いのは男性も全く同じパターンの刺繍をした上着を着ていることです。写真の男性は山の畑で育てた薬草を背負って売りに来たところです。

モン族の若い娘さん二人が刺繍用の糸を熱心に選んでいました。老いも若きもほとんど同じパターンの刺繍を身につけているのですから、伝統は祖母から母、そして娘へ受け継がれ、繰り返されるのでしょう。刺繍した生地を縫い合わせて服にするのだそうですが一着作り上げるのに三ヶ月ほどかかるそうです。十五歳ぐらいが結婚適齢期だといわれていますから、この二人の娘も晴れの日の衣装を作り始める時期なのでしょう。市場には刺繍糸の他にチロリアンリボン、パッチワーク用の布が豊富に売られています。既製品のスカートやズボンも売られているのですが、既製品を着ているのは貧しい人だと思われてしまうようです。ちなみに私が値段を

薬草を売りに来た男

聞いたスカートは六万ドン(約三百四十円)でした。

刺繍糸を売っているのはハニ族の女性です。黒に近い藍染の上下に青系統の刺繍が入っています。頭に冠る頭巾は微妙に違いますが、青系統の色が好まれることは分かります。

昨夜泊った家の主であるホアンさんから、この辺に住んでいるのはハニ族が一番多いと聞いていました。ハニ族は、険しい山と深い渓谷が連なるこの地に余すところがないほど丁寧に棚田を造り上げてきました。いまでは稲作を生業の中心に据えるハニ族の祖先については諸説ありますが、羌(チャン族)と呼ばれたチベット系遊牧民族が祖先だという説が有力です。紀元前三世紀ごろ戦火に追われ南下し、隋唐ごろから雲南からベトナム付近に住み着き、農耕を始めたということです。

刺繍糸を選ぶ若い娘

日本人の起源はハニ族であるという説があるぐらいハニ族の顔立ちは日本人に似ています。似ているのは顔つきだけではありません。ハニ族の稲作儀礼と日本の稲作の祭りと共通の信仰が存在することが比較民族学者から指摘されています。

『稲作文化と祭祀』第一書房・1999年)所載の「雲南少数民族における新嘗祭」という論文が指摘する類似点を整理しておきます。

(1)農家の一年の行事が稲作の作業過程と結びついて進行する

(2)稲の祭りの中心に稲魂信仰がある

(3)稲魂は家の神棚と倉に祭られる

ハニ族の稲作の祭りには、稲魂を水田におろす儀礼、稲の害虫駆除の祭り、新穀を供える祭などがあるそうですが、民俗学者柳田國男が日本で集めた農耕儀礼とほとんどが重なっています。

市場の一角で紫色のご飯を売っているハニ族の女性を見つけました。日本でも健康食品として最近売られているのは知っていましたが、実際に紫の米をみるのは初め

紫米

てです。身振り手振りで試食させてくれと頼むと、茶碗に一杯盛ってくれました。一つまみでよかったのですが、せっかくですので全部いただくことにして、五千ドン札を出すとバナナの葉にくるんでくれました。

まだ炊き立てで、ほのかに甘く良い香りがしました。玄米に近く五分づきぐらいの感じです。紫米の色は赤ワインで話題になったアントシアン系の色素によるもので、血管を保護して動脈硬化を予防し、発ガンの抑制に関係する抗酸化作用があると言われています。その他、たんぱく質・ビタミンB1・B2・ナイアシン・ビタミンE・鉄・カルシウム・マグネシウムなどが豊富に含まれており、中国では、薬膳料理として古くから利用されてきました。

そもそも古代の米はすべて褐色や黒紫の色が付いていたのです。だから紫米は稲の原種である野生稲の特徴を受け継いでいる米といえるでしょう。野生型の稲の種子は人が栽培することによって無色の種子へと変化していく性質があります。この栽培化には、種子の色の変化の他に、成熟した種子が稲から脱粒しないようになる性質、種子が大きく揃う性質、稲の草丈や成長・開花時期が揃う性質などがあり、米の生産性が向上します。

古代米は性質にばらつきがある、収量が少ない、稲の草丈が高く栽培しにくいなどの性格から、明治以降の日本では、ほとんど生産されなくなりました。しかし古代米は生命力が極めて強く、荒れ地で無肥料・無農薬でも丈夫に育ち、干ばつや冷水などにも強い性質を持っているので、棚田のような条件の悪い田んぼでまだ栽培されているのでしょう。

お米は餅としても売られていました。水色のプラスチック製の椅子の上に並べられているのはベトナムで「バインチュン」と呼ばれるちまきです。バインは「もち」、チュンは「ゆでる」という意味なので、バインチュンは「ゆでもち」といった意味です。一辺が十センチほどの直方体で，モチ米の中に豚肉と緑豆粉ペーストの餡が入っています。

バインチュン

バインチュンを包んでいる葉っぱはゾンとよばれる植物の葉です。竹紐でしっかり結えて十時間も茹で上げて作るのだそうです。ゾンの葉を剥いてみると，葉の色がもち米に色移りするため、もち米の外側はうすい黄緑色をしています。もっちりとした歯ごたえと、少し塩味が感じられますが淡白で主食として通用します。醤油を少し垂らしたいような気がしたほどです。

竹筒の中に紫米を入れて焼いた竹筒飯も売られていました。竹筒飯というのは私の造語で、ベトナムでは何と呼ばれているのかは聞き洩らしました。運転手のティエンさんはバンブーライスと紹介したのですが、竹飯では意味が分かりにくいので竹筒飯と呼ぶことにしたというわけです。ココナッツミルクを入れて炊くのが特長だそうで、ほのかに竹の香りがしました。

竹筒飯

東南アジアでは竹は容易に手に入る材料です。狩猟に出かけて炊飯用具などがない時、手近にある竹の節を使って竹筒にし、粟など詰めて炊きました。これが竹筒飯の元となったのです。私は台湾やラオスの田舎でも食べた記憶があります。

女性の次に食べ物に目がいくのが私の習性で、長々と米製食品のことを書いてきましたが、この辺で再び女性に目を向けましょう。モン族、ハニ族と紹介してきましたが、赤ザオ族の女性も目立ちます。赤ザオ族の出で立ちは、黒に近い藍染の上着とズボンですが、目立つのはそろって赤い頭巾をかぶっていることです。赤と黒の対比が強烈で、これがトレードマークになっています。

藍染の布には襟元、裾、袖などに細かい幾何学的な刺繍が施されています。また錫や銀などの金属飾りを頭巾や襟元に付けるのが好まれるようです。写真の右端の女性は銀の延べ板を十個も下げていて、首が疲れるのではないかと心配になるぐらいです。十歳ぐらいになると女性は眉毛を剃り落とし、大人の仲間入りをしたと見なされます。

胸元の銀の延べ板に注目

赤ザオ族は中国・ラオス・タイではヤオ族と呼ばれています。どの国のヤオ族（ザオ族）も、中国が起源といわれています。ベトナムのザオ族も中国のヤオ族と同じく素晴らしい染色や刺繍、機織の技術を受け継いできました。長い年月をかけて移り住んできているためか、衣装などはその集団によってかなり異なっているようですが、ここの赤ザオ族の特徴は花柄模様の入った紅い頭巾です。赤ザオ族の男性は赤い頭巾の代わりに赤い帯を締めています。

この市場で赤ザオ族はもっぱら買い手のようで、売り手の赤ザオ族は見かけません。良く見ると建物の中や仮設の屋台で商売をしているのはハニ族の女性たちばかりです。モン族の女性も野菜などを売っていますが、籠に入れたまま道端で椅子にも座らず客待ちしていますので、買い物に来たついでにちょっと場所をお借りして畑の農産物を売らせてくださいといった感じなのです。ここの市場で店を出す権利のようなものがあるのかもしれません。

ムオンハム村の市場は昨日訪問したカンカウ村の市場よりかなり規模が大きいのですが、それでも三十分ほどですべてを見つくせるほどの規模です。しかし市場のにぎわいは朝の七時頃から午後の一時頃まで途切れることなく続きます。一週間に一度の市場は単にモノを売り買いする場所ではなく、娯楽の場所であり、おいしいものを食べる場所であり、そして出会いの場所でさえあるのです。

市場には最先端の工業製品や贅沢品はありませんが、山間部で暮らす日常生活に必要なモノは何でも手に入るといった印

象です。何万円もする西欧の有名ブランドのバッグより、自ら染めた布に自ら刺繍をし、縫いあげたモン族のバッグの方がより美しく価値高いと思うのは私だけでしょうか。立派なレストランで食べる豪華料理よりも、仲間と談笑しながらガタガタするかたい椅子に座って食べる一杯のフォーの方がおいしそうだと思うのは私だけでしょうか。

私たちはいま豊富なモノに囲まれて暮らしていますが、そのどれとも切実な関係を結べなくなっています。コマーシャルに乗せられて次から次へと購入したモノたちは、愛着を感じるいとまもなく仕舞い込まれ、忘れられ捨てられてゆきます。初めから捨てることを前提にした商品さえ大量に出回っているではありませんか。

ベトナムの山間部で厳しい環境に適応しながら、つつましく生きる少数民族の人たちの姿を見たり、地域に密着した市場を覗いたりしながら私の暮らしは本当に豊かなのか考えさせられました。

つづく